





高

天正見屋根命式拾世苗英河食子大連 大織冠鐘足拾世

後凡兼名朝長孫兼顯三男左兵衛佐藏 位正五位下後宇夕院

面侍之帝前御日出家改俗為法名 兼好高 風雅集新十載集

公時代降并慶運阿 兼好四人高 新續古今等集有

王三郎 兼好高 兼好高 兼好高 兼好高 兼好高 兼好高

△徒然草者兼好法師之述作也

兼好、吉田ノ慶流也故二世稱吉田ノケウ

又吉田ニ有リ兼好舊跡



書記云兼好、徳寺家ノ諸大士ニテ官能口ニ有ケバ内裏 後院前沙ノ千方世ニケリ



依之草ハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

付クハコトハミカコト

Horizontal text at the bottom of the page, possibly a title or reference.



権右大臣白物

此花生れは西三三有  
いりては 教養のしるし

徳太子御物

心あり可畏とかまて  
身觀年とあり

清和天皇御物

人君の行ありぬり  
此花起非人百種

故後醍醐天皇御物

下守霞此花是非人間種  
樹枝頭第二花

志信清和天皇御物

多止とくあり  
乃人 権政園白と

胡蝶舞手詩

職原鈔曰 靴柄必蒙一座之  
今者 近九三廣司

是三カハ大徳  
論語里仁爲美 廣是今之所欲也

みづのぬらぬら  
竹のそのみ乃

と志 夢まで  
人 乃此

ねあぬらぬら  
鷹目 七清花 糸我

下乃人此花  
白寺 徳寺 木野山 菊亭 三条花出院

なりおどたどるき  
後醍醐天皇 執柄 輔佐 皆明白 吳名

なりおどたどるき  
後醍醐天皇 執柄 輔佐 皆明白 吳名

宜吉故無一人

さきあり 権政の依之 又今之公

た人 権家のかへはた人あり  
されともさき 縁まてはくか

少将とさして 可むゆ  
よりありと 勝り今人ハ及身

也先と弁府の及身とて 承ゆ  
されと承て 承てあり小

力ハ及身とあり  
とあれ ありあれと承て

ありと承て 承てありと承て  
ありと承て 承てありと承て

ありと承て 承てありと承て  
ありと承て 承てありと承て

ゆりとも思ふ女子し  
放言又放言ト云

オノハとあれぬらぬら  
ホトシホトクニ随テフサイ

りぞれよりぬらぬら  
高貴幸之又下天子御入幸カレテ

つぎうぬらぬらぬら  
清納言ト云

ありとも思ふ女子し  
高貴幸之又下天子御入幸カレテ

はれぬらぬらぬら  
清納言ト云

かりぬらぬらぬら  
高貴幸之又下天子御入幸カレテ

りのやにぬらぬら  
清納言ト云

最上ノ下ノ是ハ京好ノロシトハ根ニテ俗クシテ法師ハウトニシトハ

失物

失物



それよりきつてハ、又佐佐木

上人交れホ乃たらひあろ人

肥後守清元捕

女房あり 腹志

いさやひまゝの

のうの益の字は、まろの句はま

也時よあひていせいあろ心あ

又元亨釋書、傳あり

又元亨釋書、傳あり

かきろも実方にもうり

かひまらにの

てい

のひん

仏の成教またあんと

わらうのむす

ありさりのす

ありさりのす

ありさりのす

あいま

あいま

あいま

あいま

あいま

あいま

あいま

あいま

あいま

あいま

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一

失道巻一



さへや 舞也

志ふくろり 日本記大天以上

各有 漢解 此ニハ我ヨリ位ノヒリ

度量ありぬまじ

文のら 漢書字向のらあり

有識 これらる事あり

中事 おややきしこふめり禁

中のらう アトしあり

人乃後 唐書魏徵薨ハ宗臨

朝難日 以錦為鑑可正衣冠

以古為鑑 可知興替以人為

鑑可明得失 朕常保此三鑑

内防已過 今魏徵地一鑑亡

矣 又晉書 衛瓘曰 此人之水鏡也

くわくさ 真ハ衣冠くしき許

行あり の御事ハ人然し許

銀抄卷一

心づ海の現人 さきさき ありぬれ

志あつたり かゝるけあえ けりあり人

ふら立海 源氏之タリ詞 けりあり

ふら立海 氣色オトリ ありあり

ふら立海 是ヨリ養能 ありあり

ふら立海 さきさき ありあり

管絃 イハト のた イハト ありあり

ふら立海 難面アシカラス又長面又拙ハ暢 ありあり

ふら立海 能書ナラズ氏漢 ありあり

ふら立海 ヤサシキ ありあり

ふら立海 イハト ありあり

ふら立海 イハト ありあり

ふら立海 イハト ありあり

ふら立海 イハト ありあり

ふら立海 イハト ありあり

ふら立海 イハト ありあり

ふら立海 イハト ありあり

ふら立海 イハト ありあり

ふら立海 イハト ありあり

秋賦 ハハト 領シ  
或ハハト  
人々ニテ有シ  
ニシムル  
不有徳シ万民  
後シキト

ケコ三後 下根 家子 下戸  
但下戸ノ後ニテ有

桐子トリ カクシヤイバシラウタキモチ  
後濃ノ小山・石川・秋殿以上  
総角・高砂・能鳥カハ上律

一乃 ハハト ありあり

て ハハト ありあり

き ハハト ありあり

き ハハト ありあり

か ハハト ありあり

ロ ハハト ありあり

衣冠 ハハト ありあり

管絃

桐子

後濃

小山

石川

秋殿

高砂

能鳥

衣冠

衣冠



信濃國白河宮公基在任時政風白  
自信忠平

九條殿 右丞相師輔云の作  
一卷あり

徳院 人皇八十四代は多  
羽院弟三宮子禁秘抄一巻  
あり禁中の所抄とも云ふ

おやをれなり物 三かえり  
とあり又天事と云ふ  
かやをれなり物 三かえり  
おやをれなり物 三かえり  
とあり又天事と云ふ

とるる車にのりてまはるるに志

とるる車にのりてまはるるに志

事あらねり九條殿に御し

徳院の禁中此事をも

とせ給ふるものおやをれなり

とすも 是は禁秘抄の下の東好記

おふいふともいふことやあさん

孔子三十三位下有

男はさうく女は危は底

お記のらうりすま 露お記のらうり

親のいさめせれ 譏諷

公のいさめせれ 譏諷

おひるれ 推ねらるる

ろび夜あ記のらうり

と記すられたれらるる

失記

徳院詳  
寺成  
奉秘抄  
國故抄  
院海集  
贈方  
至念  
詩經集注  
關雅集  
安主若菜  
不得  
水  
文王子園公

おやをれなり物 三かえり  
とあり又天事と云ふ  
かやをれなり物 三かえり  
おやをれなり物 三かえり  
とあり又天事と云ふ

とるる車にのりてまはるるに志  
事あらねり九條殿に御し  
徳院の禁中此事をも  
とせ給ふるものおやをれなり  
とすも 是は禁秘抄の下の東好記  
おふいふともいふことやあさん  
孔子三十三位下有  
男はさうく女は危は底  
お記のらうりすま 露お記のらうり  
親のいさめせれ 譏諷  
公のいさめせれ 譏諷  
おひるれ 推ねらるる  
ろび夜あ記のらうり  
と記すられたれらるる



たつれとふつと海とちん  
とんせうとせりおそれたれ  
秋とせの世へよこらふ女房を  
いづれの人うつれとてさへ

後の世代事 けはむを継承あり流

氏れりつ大將ありおひい  
前の子はよせむのあまや  
後世よりつとふとてさへ

不幸 ちんせうとふつと海とちん  
あつとふつと海とちん

あつとふつと海とちん  
あつとふつと海とちん  
あつとふつと海とちん

後乃世れとふつと海とちん  
あつとふつと海とちん

不幸に愁よあつとふつと海とちん  
あつとふつと海とちん

らあつとふつと海とちん  
あつとふつと海とちん

野極

フシアシキコト  
ツニナシキコト  
ハシキコト  
トセシキコト  
ミナシキコト  
ナシキコト

まのりもさく せよとむら  
あつとふつと海とちん  
あつとふつと海とちん

願基中納言 西のり大納言  
明の孫大納言後賢卿の  
一男也中納言隆国也

配所 流罪を遷の人代あつ  
不也

前中書王 中勢兼明親王延  
表の次子也侍文能書の人  
也

九條左政大臣 伊通ス也  
花園右大臣 有仁也後三  
条院孫補仁親王の次子也

あつとふつと海とちん  
あつとふつと海とちん

願基の中納言のひらん  
あつとふつと海とちん

あつとふつと海とちん  
あつとふつと海とちん

あつとふつと海とちん  
あつとふつと海とちん

あつとふつと海とちん  
あつとふつと海とちん



淳敏大臣、  
大織冠天孫  
亂石大臣の權を  
左大臣冬次云云  
元大臣冬次  
長良 基經  
淳敏大臣

そり 曾の字の子孫とく不尊  
重也 自曾祖至無窮皆得趣  
曾孫

淳敏のたぐ、大政大臣良房

益八忠仁と淳敏のきささこの

父清和天皇の御孫也

世継の翁代物候 一又大政とあ

つく有る為業法名宗法作

北文徳天皇より後一系

正しく十代百七十八年帝王

大化ホの事とせり

聖徳太子 用明天皇御子也

平氏聖徳太子傳曆曰太子

三回都陵劫墓工曰汝斷四

流服意趣有二三者為金無

大行道之煩 二者我子孫為

あん 前申出五九條を

淳敏のたぐとく不尊

重也 自曾祖至無窮皆得趣

曾孫

淳敏のたぐ、大政大臣良房

益八忠仁と淳敏のきささこの

父清和天皇の御孫也

世継の翁代物候 一又大政とあ

つく有る為業法名宗法作

北文徳天皇より後一系

正しく十代百七十八年帝王

大化ホの事とせり

聖徳太子 用明天皇御子也

平氏聖徳太子傳曆曰太子

三回都陵劫墓工曰汝斷四

流服意趣有二三者為金無

大行道之煩 二者我子孫為

金無 日本之相續又曰子孫  
不眞豈云大咎孔子遺教無  
後嗣者為不孝矣吾為釋迦  
大聖弟子豈為孔子小賢弟  
子云  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ

まのこころよきことす  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ  
あつ時 二あまあまはあ

世継の翁代物候 一又大政とあ  
つく有る為業法名宗法作  
北文徳天皇より後一系  
正しく十代百七十八年帝王  
大化ホの事とせり  
聖徳太子 用明天皇御子也  
平氏聖徳太子傳曆曰太子  
三回都陵劫墓工曰汝斷四  
流服意趣有二三者為金無  
大行道之煩 二者我子孫為

墓城のつとせは  
うときれうと  
子孫あせうと  
はうとせうと  
野の落きあつ時  
山の嶺  
あつ時  
世の定めあつ時



ありあ合れ判明よありあり  
ふたつくらぬもあふり又化  
野とよもさうあこれまてり  
きんもあらきあ  
きん山 あらうまきまのす  
うとさう人のとさ  
ありひうあふりあふりあ  
ふらあふりあふりあふりあ  
うけうの 遊絲蜂蟻蜻蛉野馬  
陽熇陽熇うけうけうけうけう  
又さうさうさうさうさう  
たふれよのちけうけうけうけ  
あうりあきうのせうとけうけ  
あついでと 莊子希逸陽義  
蟪蛄寒蟬也春生其死其生

ことしれとらるふ。人々も  
まへあ。かきうかのたふあ。あ  
本草綱目曰蟪蛄有寒蟬四月比山  
の蜂のまねとてあふりあ  
まへあ。かきうかのたふあ。あ  
本草綱目曰蟪蛄有寒蟬四月比山  
の蜂のまねとてあふりあ

周景  
人法  
天地生  
智天  
地物  
終天  
地智

ありあ合れ判明よありあり  
ふたつくらぬもあふり又化  
野とよもさうあこれまてり  
きんもあらきあ  
きん山 あらうまきまのす  
うとさう人のとさ  
ありひうあふりあふりあ  
ふらあふりあふりあふりあ  
うけうの 遊絲蜂蟻蜻蛉野馬  
陽熇陽熇うけうけうけうけう  
又さうさうさうさうさう  
たふれよのちけうけうけうけ  
あうりあきうのせうとけうけ  
あついでと 莊子希逸陽義  
蟪蛄寒蟬也春生其死其生

まへあ。かきうかのたふあ。あ  
本草綱目曰蟪蛄有寒蟬四月比山  
の蜂のまねとてあふりあ  
まへあ。かきうかのたふあ。あ  
本草綱目曰蟪蛄有寒蟬四月比山  
の蜂のまねとてあふりあ

周景  
人法  
天地生  
智天  
地物  
終天  
地智

論語陽貨篇子曰四時見而馬具終也

子曰  
三曰  
四曰  
五曰  
六曰  
七曰  
八曰  
九曰  
十曰  
十一曰  
十二曰  
十三曰  
十四曰  
十五曰  
十六曰  
十七曰  
十八曰  
十九曰  
二十曰  
二十一曰  
二十二曰  
二十三曰  
二十四曰  
二十五曰  
二十六曰  
二十七曰  
二十八曰  
二十九曰  
三十曰  
三十一曰  
三十二曰  
三十三曰  
三十四曰  
三十五曰  
三十六曰  
三十七曰  
三十八曰  
三十九曰  
四十曰  
四十一曰  
四十二曰  
四十三曰  
四十四曰  
四十五曰  
四十六曰  
四十七曰  
四十八曰  
四十九曰  
五十曰

秋死不見四時之全  
あり河海は無越困難  
は乃ちあふりあ 莊子多男子  
則多懼富則多事壽則多辱  
是二者非所以養德也  
朝露貪名利夕陽愛子孫  
論語及其老也血氣既衰  
之在得 又云若而不死是  
為賊

せん。余あまねん厚おあう  
まへあ。かきうかのたふあ。あ  
本草綱目曰蟪蛄有寒蟬四月比山  
の蜂のまねとてあふりあ  
まへあ。かきうかのたふあ。あ  
本草綱目曰蟪蛄有寒蟬四月比山  
の蜂のまねとてあふりあ

周景  
人法  
天地生  
智天  
地物  
終天  
地智



世の人乃 礼記飲食男女人之

大欲存焉 又淫聲菴色易

惑人 白氏文集古塚狐妖

且老化為婦人顔色好見者

十人八九迷假色迷入猶若

是真色迷入 濼過此彼真此

假俱迷入云云

えあぬ えもいれぬうりき

こひひの八雲子ささうらひ

うあろこくあり

かときめき 枕草子よかときめ

きすうゆめきたきゆたきて

むりりやうとあり

久米代仙人 元身教養久米仙

寺和列上郡人入深山学術

法食松葉服藤葛一且騰空

ありはあんあささうら

世乃人化まるとすう色慾

あささうらの心もあうこれ

うぬあひあひのそれあふ

ささうら衣袋よたき地と

ありあう。ああぬあひま

必心ときめさすう地あり。案

の仙人地あふ女れささ

きりきりんて。あささうら

あんの海もよあささうら

あささうらに肥あささうら

あささうらのあささうら

あささうら

女ハ髪はあささうら人の目

あささうら人のあささうら

あささうらあささうら

飛過故車會婦人以足踏踏  
其脛甚自急生漆心即時  
墜落 替曰昔婦女誓曰我  
不跨一角仙頭不出山果然  
久米見白脛而墜有以矣哉  
於戯色之毀人也可不慎乎  
かのま かよりつらひを  
あささうらあささうら

女ハこれ 文選衛右興於鬢  
髮飛燕電於射軀 詩君子  
偕老篇髮莫髮如雲不眉也  
けさひ 氣は字をさうら又  
形勢とも是と氣とさうら



うちあり 常住非の義あり

たぐあつさ極あり

いもねす ねもねすあり

ふこあつあつこれくらをねまふ

かまけつらつらつらよねよ

シキモ子子モモ子夜もあつ

春のののののののののの

ぬゆんくぬあぬぬぬぬぬ

垢あすんぬぬぬぬぬぬぬ

ふくく人又するたつらつら

ちよくゆんあり

おもえおえら 思せ執志

六芸 眼耳鼻舌身意を六根

と一色聲香味觸法を六塵

とせらと

樂談 けうあくととむへ

ぬくひれくひつらつら

金巻一

あつらねとよあねとらあ、處

もも人の心然まらうとて女

のうらとけらつらつら

好賢王御牌宣事鉄丸 寐 寢

たつともあつらつらつら

もあつぬらとよもあつたあ

たつとあつらつらつら

あつあつあつらつら

あつあつあつらつら

あつあつあつらつら

あつあつあつらつら

あつあつあつらつら

みか厭離ちつへ。と申した

うはつあつあつらつら

うはつあつあつらつら

うはつあつあつらつら

うはつあつあつらつら

うはつあつあつらつら

うはつあつあつらつら

うはつあつあつらつら

うはつあつあつらつら

朱文公 自警言 詩十年 溪海下

天追卷一



梨渦ハ

身輕<sup>レ</sup>肩<sup>レ</sup>對<sup>レ</sup>梨渦<sup>レ</sup>却<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>  
無<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>欲<sup>レ</sup>險<sup>レ</sup>幾<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>到<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>誤<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>  
生<sup>レ</sup>

金瓶梅一  
レト心ニシメタル事

きいげまもいあり

アキトク<sup>レ</sup> さもありぬへきは<sup>レ</sup>原<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>居<sup>レ</sup>故<sup>レ</sup>異<sup>レ</sup>林<sup>レ</sup>推<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ア<sup>レ</sup>キ<sup>レ</sup>ア<sup>レ</sup>キ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>津<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>

後<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>造<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup> 家<sup>レ</sup>居<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>り

た<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>く 白<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>夫<sup>レ</sup>同<sup>レ</sup>良<sup>レ</sup>豫<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>深<sup>レ</sup>林<sup>レ</sup>亭<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup> 莫<sup>レ</sup>歌<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>會<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>計<sup>レ</sup>微<sup>レ</sup> 後<sup>レ</sup>夜<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>門

り<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>り 逆<sup>レ</sup>旅 寄<sup>レ</sup>寓 銷<sup>レ</sup>空<sup>レ</sup>室<sup>レ</sup>美人<sup>レ</sup>到<sup>レ</sup>了<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>終<sup>レ</sup>飯<sup>レ</sup>

地<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>位<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>

め<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ね<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>個<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>

れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>

こ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>個<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>

へ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>前<sup>レ</sup>裁<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>

ま<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>

い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>

ら<sup>レ</sup>す 技<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>

金瓶梅一

く<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ア<sup>レ</sup>ー<sup>レ</sup>ひ

く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>

れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>

こ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>個<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>

へ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>前<sup>レ</sup>裁<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>

ま<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>

い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>

ら<sup>レ</sup>す 技<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>

い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>

ら<sup>レ</sup>す 技<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>

い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>

ら<sup>レ</sup>す 技<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>

い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>

ら<sup>レ</sup>す 技<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>

れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>

こ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>個<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>

へ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>前<sup>レ</sup>裁<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>

ま<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>

い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>

ら<sup>レ</sup>す 技<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>

い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>

れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>

こ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>個<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>

へ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>前<sup>レ</sup>裁<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>

ま<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>

い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>

ら<sup>レ</sup>す 技<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>

く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>

い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>

ら<sup>レ</sup>す 技<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>











三家者世也  
五者亦有  
獻子之家訓  
不與之友全

打ちつらつてせよお

さしめとおもふも。老いよふかた

すこころろ 名かおとめい

くもはれとをくくくく

あつそふ養之されたか座候

くもはれとをくくくく

らるるくくくく

人ま。だくこのありあつて

はれとをくくくく

くもはれとをくくくく

おの事いそくくくく

くもはれとをくくくく

これとをくくくく

くもはれとをくくくく

くくこのありあつて

くもはれとをくくくく

くくくくくく

くもはれとをくくくく

安公座のありあつて

くもはれとをくくくく

くくくくくく

くもはれとをくくくく

書城南詩曰

新涼入郊墟

くもはれとをくくくく

時秋積雨霽

簡篇可共讀

くもはれとをくくくく

燈火稍可親

簡篇可共讀

くもはれとをくくくく

乃世の人をなとす 迂史

平日讀書上師聖人下友群

賢仁傑曰黃卷中亦與聖賢

對何暇偶俗吏語耶

こころろ 無道とくくく

文選 梁の武帝の子昭明文選

撰すくくく六十卷あり

われあり あつてんあり

白氏文集 白樂天く詩文とわ

つめくくく

老子 拙く季名の耳字の伯陽又老

淵くくくく地國の人の老子

涇上下あり道德經の

南華の篇 莊子あり南華真

経とくくく老子あり季名篇

金木卷一

頁實入

不覺頁我 而空

由未入

頁實入

隔

落名通

于文章  
分せし  
事  
五家  
云之  
甚

竹之園生梁王兒園賦二條作檀案史池水











聲也これ故まゝなるをいふ

そのと梁茶と云ふ

杜佑通典云漢有真公書

能吟梁上塵起

郢曲 文選宋玉對楚王問云

客有歌於郢中者

元稹梅詩郢曲琴空峯

郢ハ楚國のなごあり是を

哥雋と郢曲といふ

とくさ 言雜とく

あられも少く入地御

必抄の郢曲のよき歌を又

あられあるはるかかろ

じうの人をいふひさ

らうともなふみれ

きさゆりや

いづくもあれきり旅きたるをめはじら

とくさいりかこえありきおふく

おふくをめあれあ事のまじりか

もいめて文やまの事は

いひやうかうたれを

とあつハ一まは

いひやう

尺ゆき寺法おと

とさーくこもりま

天下とこやこは

ハ法非いのま







くろり風を吹きて唱せ人城。

くろりまのそと控つ又まゆま

ひてうまも飲きういりうり

かのをち涼くうりせん孫晨を

冬月は柳を海おきて葉一葉

宵くろを夕まらねあ

まらおさめたり唐の人を

いりまのいりまのいりまのいりま

かのをちまのいりま

かのをちまのいりま

石亭

孫晨 蒙求云孫晨字元家

食織席為葉明詩書為京兆

功曹冬月死被衣葉一葉暮

卧朝収

これらの人ハ夜マも停ヘテ

日中の人々書マカクマ

勿論くろも信ヘマ

一きと

元亨利貞有而四時之地五行有而草木之生

此ののろろりい候兼好

松葉子涼成地涼子也やうま

いへりまのいりまのいりまのいりま

二女の形管よれらんや

このわかれハ秋のうらさ

まのいりまのいりまのいりまのいりま

わくまのいりまのいりまのいりまのいりま

物若就中腸断是秋天

やまづく やうくまわくあうせ二月のころを

まのいりまのいりまのいりまのいりま

まのいりまのいりまのいりまのいりま

まのいりまのいりまのいりまのいりま

まのいりまのいりまのいりまのいりま

あはれとあはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれとあはれと



天徳のまひ 花梅の青枝

あやハさうま あまのこもあま

梅の匂ひは青もこいり

さうり

梅のむねあまうもむりしき

お中一初足れまのし月

多うりもかろうあられとおもかめせ

たうそてあましーやとの梅も

灌仏のころ これうりまのこ

と云之灌仏は月八日よと

かりりい佛生と云ハ推古天皇

よりはまる 釈尊俱毘藍城

あま生れしうし時天龍水

とそきそてわみせまうりー

中とー也 聖徳太子降生アリテ

おのころ 契茂の糸とよみ

ゆきこころあまのいまれきーき

ようあめれきーいあまも

事のおよまめきそてのやうあ

日新の垣根れきとえ出流り

やまのうらや腹とらて花も

やうきーいあまのうらあま

折しもぬ風うらつきていあ

こしくらりるぬきあまはり

日月中れ西日とよりる飲用

天皇よりそしき

あやめくころ 天平十九年

五月は勅ありて百官法人

こくく 葦浦の薄とく

へーかけさうんものち官

中よへへくすと定めらう

弘仁式も五月三日平且

は葦浦ふもきひあて南殿の前よと

内裏殿舎葦浦事文類聚前集云端牛以葦浦或綴或屑酒

早苗とら きのふとらあらりしう

水鶏のたたく たくくあめ

いせぬあうん

あやしれ家はたうかの

源氏夕負巻まかの白くさけり

とあんたうかとらうらむのあ

りまてよろつよ思ふとのこ

あやまのうら梅のうらあ

おと梅のうらひまうらうら

立りあうらひわらうら吹

おと梅のうらひまうらうら

立りあうらひわらうら吹

おと梅のうらひまうらうら

立りあうらひわらうら吹











ひらりやうこちあやうさ  
 みきものくかひーそては  
 世乃おれことさしてさ  
 うされおちささあ  
 れさものさうぬおあれす  
 さまーきためーよひを  
 きらん人乃かあさくふと  
 てみとゆきあきさせたま  
 ふ 河海云流ぬゆ松ま  
 依よすさまーきさとのそ  
 すの月夜あうかいけさ  
 又十列珍物十二月月夜  
 扇あり  
 佛名 十二月十九日より  
 廿一日まで三日あり或  
 一夜の例ありは仏名云々

とまあして。おのこささう  
 わたおとあより煙れあこ  
 うたうきね。ほれれそ人  
 こまらうきあへはう  
 あそあう。すさ海き抱よー  
 てさうひらあき月のさじ  
 けくすめろ。女日まのけさう。  
 にかうきものあれは仏名荷前のささ

三世法依の仏号を唱へて六根の罪を滅せらるる也。依り仏名強子とくあり  
 とこあの功徳ハスうりあきまや宝亀五年十二月より一より兼和の比  
 ハ毎年必ふさう日の間ハ法因より救生禁のより格子んえさうとあ  
 公事根原に載り 元亨釋書九釋靜安從西大寺常隆學法相嘗居比良山  
 讀十二佛名經禮拜修懺其聲聞帝闕諸別間有國者且茲救賜僧官兼和五年  
 奏置官中李冬佛名懺  
 荷前 十二月吉日を撰ふ先十三日小休さうとくしてさう使ハ云卿のも殿  
 上人のもあり荷前と六上陵ハ墓は年の後りハ幣帛をまもせ給ひさ十陵の  
 才一と天智天皇をれれさき山城國山崎あり昔ハ帝少馬よめさきて山志  
 ふの里は行幸ありてそのま還り給はさりき給ふ崩おといはくとも  
 ちう人ふ唯少香のまらまらりさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 ちとてさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 仁明天皇深草乃陵あせ  
 さのさうさうさうさうさう  
 喜式祈年の後乃祝詞は  
 前と出てさうさうさうさう

の使らあさう。あそあやんと  
 あきこ公事との志々々。まれ



事 禁中おひらりくまらり

しとく

追儼 公事根源云十二月廿

小行りり今日ハあやうま

あれん大舎人寮鬼と云

め陸陽寮對女と云南殿

の追子つきてよむ上卿以下

誓の夫よていつ仙花門より

あくくくくくくくくくく

のくくくくくくくくくく

て世人紺の布衣著くくく

は初まらば年天下は百姓

は方拜云事根源云元正乃

災と云くくく宝祚と云

和五辛正月寅刻子天地四

金抄卷一

十三

いしきいなるなるひて。いしき

おこふらうくさるんいしき

まわ。追儼より。宮内寮

の追子つきてよむ上卿以下

誓の夫よていつ仙花門より

あくくくくくくくくくく

のくくくくくくくくくく

て世人紺の布衣著くくく

は初まらば年天下は百姓

は方拜云事根源云元正乃

災と云くくく宝祚と云

和五辛正月寅刻子天地四

あき人のくく事とてあま

あまらう幸れたり。あま

くくくくくくくくくく

あも男女文字の文法。あ

ら可是と幸山の蛇の首尾

失追

十四

觸

觸と云くくく又皇極天皇雨を

と并し流ひたれハ雨五日

くくくくくくくくくく

あき人のくく事とてあま

あまらう幸れたり。あま

くくくくくくくくくく

あも男女文字の文法。あ

ら可是と幸山の蛇の首尾

あも男女文字の文法。あ

ら可是と幸山の蛇の首尾

あも男女文字の文法。あ

ら可是と幸山の蛇の首尾

あも男女文字の文法。あ







沅湘日夜 三体詩戴叔倫詩

沅湘日夜東流去不為愁人任少時註云身不得時

愁水之去所以深傷也之不

能去也蓋叔倫事曹王於湖

湘有是作泰必游讀柳州高

詞云柳江幸遠柳山為誰流

下滯湘去正用此意 沅水

湘水皆水名

嵇康山澤小童詩

文選卷四十三嵇康與山濤

絕交書云游山澤觀魚鳥心

甚樂之一行作吏此事便廢

安能捨其所樂而從其所懼

哉 嵇康字叔夜竹林十賢

の其一人也晉書小傳あり

もあせあつるの月くらりあき

るき地あじとひいお又むりあ

う長あれあそひりあ

うきあつるあはあああ

月花さあ風あつるあ

ああああああああ

ああああああああ

日夜東流去愁人のあはあ

嵇康山澤小童詩

嵇康

人遠く水子さつる

あつる

あつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつる

晋七賢  
嵇康 阮咸  
阮籍 嵇康  
劉伶 山濤  
王戎 嵇康  
謝安 嵇康  
林之遠 逸

夫也

夫也







何殿

清涼温明

貞觀

何門

南養福

皇嘉

西談天

殷富

偉

達知

東陽明

二枚東より濊の屏風と立夜  
沙殿丸方に副障子あり其屏風  
の内かよ沙洞度と置之禁秘

抄河海ありと云々也

あふ殿あふ門 一本にあふ殿と

南殿とあふ八非之内裏の殿

門敷多ありねよ一くよと云

と云今八殿よよあり

小板あり 必目抄子神仙門中

を云今八殿よよあり

さき戸 今八流涼殿の坤北

廊下の間子あり

陳よ殿のまうきせよ 後ハ蛇

金巻一

於納何殿何門ありと云々

しよきまこゆしあやしのあ

しよありぬ今よ小部小板ありや

アタありぬ今よ小部小板ありや

ゆき陣よ殿のまうきせよ

しよありぬ今よ小部小板ありや

しよありぬ今よ小部小板ありや

めりしよの陣よ事あり

あふ殿あふ門あり

人よものまうきせよ

妻戸南大妻戸一間也 帳同清涼殿

東枕置御座敷也 御枕有直一階奉安御

簾皆有覆蘇芳也 御鏡東南帳四角有燈樓

又帳南西北敷置為女房座 河海

云夜沙殿の沙帳れは角は燈樓あり 搔枕とて

ありぬ今よ小部小板ありや

しよありぬ今よ小部小板ありや

詩賞

上東上西

宣陽陰明

日花月花

等所有之

上卿の陳よて 上卿よハ大に

大中納言等れハ婦の降よて

惣奉行すよと云々と云々

内井と云々

鉄道巻一

七



徳大寺の太政大臣 實基之也

延喜式第五卷宮忌詞内七

言佛稱中子經稱漆紙塔稱

阿良の伎寺稱淨尊僧稱髮

長尼稱女髮長齋稱行勝外

七言死稱祭保留稱病稱夜須

美哭稱塩岳血稱阿世打稱

撫肉稱菌墓稱壞又別忌詞

堂稱香燃優婆塞稱角菩同

第六齋院司九忌詞死稱直

病稱息泣稱塩岳血稱汗肉

林菌打稱撫墓稱壞

又一没不佛稱保稱とあり又

さらすくことらるるへて句花

大政大臣の御事

言佛稱中子經稱漆紙塔稱

阿良の伎寺稱淨尊僧稱髮

長尼稱女髮長齋稱行勝外

七言死稱祭保留稱病稱夜須

美哭稱塩岳血稱阿世打稱

撫肉稱菌墓稱壞又別忌詞

堂稱香燃優婆塞稱角菩同

集難於子選子内釈也

のいつきとゞえくろとき西まひ

くひてよめり ともいひむき

いえぬしとあせんそあしむき

てねとのころあく 林よゆりけり

抄抄くろくろよあけり付初と

しと也 伊勢 天照大林は廟

しと也 伊勢 天照大林は廟

吉田

以社春日明林と勸誘と

大原野 以山と小陸とア之文也天皇

吉田

大原野

以山と小陸とア之文也天皇







一修院初幸し終ひしとあり  
栄花物語ありま極致する  
宇治園白頼通とみねと  
道長との序述云々

志とまり半後一昔の  
五人の信れ世まくとおの  
とく志ハそまりと半後  
うつりかろく

広園多くよせられ 道長云  
病中お法成寺へ広園おかり  
寄附せられと栄花物  
説きあり

我師多うのこ 我師尊孫也  
帝のいしるせせけとめ 後取  
園白大匠おとの義  
金堂 倭名集云佛殿金堂也

風雅集おろくのみ 且法成寺に  
まよそて淡竹りろろ

くもりあきみろくおれくおろ  
りりもあききとのあきろろ

正の比 花園院の半ま  
量寺院 法成寺あり何所

院と安置せしとけよ量  
寺院とみく仏の祈るも

八九所の浄土よりとと甲  
相ふとも上品中お下あろり  
めるとけ院作るくこと世継  
りもあきろり

丈六 仏れさけハ一丈六尺あり  
かんりの名張とよあき 法成  
寺あとのこととあきとあき人  
如け況やそかた回れはあ

あまてゆく末まるとあかりとま

一時のうあんと世のいかなるりあせ

とてんらおりてんや大門金堂

おとらうくまあるうとふれの

比南大門をよまぬ金堂の其後

たあまあしるまのまらりろ

日ともあ 量寺院よりろ

をうこととあつてろ丈六の佛れ

神のたがもてあひはり

まよ。成大初まの額かひゆき

かきつ飛あまやうはんゆう長あ

法花堂あまのあしけろり。是

も又あましうあんかろりのあ

跡にはあはあまのつろり

すんろり跡るにあしとてしうま

あまろりあ。あまろりあ



人あき也

風も吹あきさうらうよ人の花あき  
古今に貫之るる

楊花さうらうぬもあきあき  
人のさうらう風も吹あきぬ  
あきさうらうよよのあき  
人のあきさうらうありけ  
且世にあきありゆ、世にあきあり  
いさうらうありゆ、いさあきあり  
あきさうらうありゆ、あきあり

高井上人白絲と人の心よあき  
あきさうらうありゆ、あきあり  
あきさうらうありゆ、あきあり  
あきさうらうありゆ、あきあり  
あきさうらうありゆ、あきあり

淮南子曰揚子見蓬路而哭  
之為其可以南可以北墨子  
見練絲而泣之為其可以黃  
可以黑高誘註曰恠其本同  
而未異

堀川俊百首 あきの百そあり  
物交の百そハ摧大狗と藤原  
公安勘進之くにひくむい  
乃一の言ハ初云安野のまき  
萱菜の野

沙國ゆつり 天子れ佐と春  
まへゆつりあふ時の言まき  
讓國とも沙讓位ともや  
叙奎内侍取 乞と三種林

録金巻一

あきさうらうありゆ、あきあり

あきさうらうありゆ、あきあり

あきさうらうありゆ、あきあり

あきさうらうありゆ、あきあり

あきさうらうありゆ、あきあり

あきさうらうありゆ、あきあり

あきさうらうありゆ、あきあり

あきさうらうありゆ、あきあり

あきさうらうありゆ、あきあり

あきさうらうありゆ、あきあり

あきさうらうありゆ、あきあり

あきさうらうありゆ、あきあり

あきさうらうありゆ、あきあり

あきさうらうありゆ、あきあり

あきさうらうありゆ、あきあり

失追巻一

廿二



とや八室剣も天叢雲銀も

天叢雲銀も天照太孫天の御孫

八坂邊之津流石くまの八

八坂邊之津流石くまの八

坂邊の曲がとや天照太孫

坂邊の曲がとや天照太孫

素盞盞鳥とらふひのひの時

素盞盞鳥とらふひのひの時

髪小まといひつきさ勢多い

髪小まといひつきさ勢多い

けり抱く

けり抱く

内侍殿 異西ともす秋後の

内侍殿 異西ともす秋後の

とく八咫鏡共真鍮津鏡と

とく八咫鏡共真鍮津鏡と

もや

もや

新院おとをませまひ 水位とお

新院おとをませまひ 水位とお

このもりのとれやつこ 金殿

このもりのとれやつこ 金殿

寮の下刃とも禁中の掃除

寮の下刃とも禁中の掃除

とすろこ

とすろこ

そのものやつことも八伴成れとの

そのものやつことも八伴成れとの

金殿寮の下刃とあるこや

金殿寮の下刃とあるこや

つらゆね乃字こ

つらゆね乃字こ

侍所 赤忌ぬり色之盛衰抄云

侍所 赤忌ぬり色之盛衰抄云

諫簡の雨に皇居之以旨易月

諫簡の雨に皇居之以旨易月

てするれ赤忌ぬり

てするれ赤忌ぬり

何れ乎 盛衰抄云侍所北山

何れ乎 盛衰抄云侍所北山

いじきとさけ 其其の簾布木

いじきとさけ 其其の簾布木

多 ミラフ

多

爪太刀平儀其外装束等皆非

爪太刀平儀其外装束等皆非

常也 下流のみすと翠簾とらさ

常也 下流のみすと翠簾とらさ

布ぬりとも布帽額とまき木公

布ぬりとも布帽額とまき木公

ぬりありともさしとあつともはく

ぬりありともさしとあつともはく

た刀馬尾まで銀のふちぬ

た刀馬尾まで銀のふちぬ

平法 とも思海あり

平法 とも思海あり

ゆきき あくまのひまじ

ゆきき あくまのひまじ

壺八抄壺也天照太孫天の御孫

八坂邊之津流石の上枝よりきこ

髪小まといひつきさ勢多い

素盞盞鳥とらふひのひの時

けり抱く

内侍殿 異西ともす秋後の

とく八咫鏡共真鍮津鏡と

もや

新院おとをませまひ 水位とお

このもりのとれやつこ 金殿

寮の下刃とも禁中の掃除

とすろこ

そのものやつことも八伴成れとの

金殿寮の下刃とあるこや

つらゆね乃字こ

侍所 赤忌ぬり色之盛衰抄云

諫簡の雨に皇居之以旨易月

てするれ赤忌ぬり

何れ乎 盛衰抄云侍所北山

いじきとさけ 其其の簾布木

多

爪太刀平儀其外装束等皆非

常也 下流のみすと翠簾とらさ

布ぬりとも布帽額とまき木公

ぬりありともさしとあつともはく

た刀馬尾まで銀のふちぬ

平法 とも思海あり

ゆきき あくまのひまじ

壺八抄壺也天照太孫天の御孫







修せりしは氣浄大徳并也

常理等一はんり

心ありし一源氏よまき序

会涌きひておがしなく

られりしやこころあり

こころ

河海よ心よかりし

周章 櫻

とのこころぬ 抱ふこころ

くこころふきやりのあり

あり

そこの日 廿九日也

ゆありぬ 散とまてあ

くこころやよはりこころ

ぬ別こころありし退散

はる俊之又より成ありや

のたむむなるこころ我あこころ

のたむむなるこころ我あこころ

のたむむなるこころ我あこころ

のたむむなるこころ我あこころ

のたむむなるこころ我あこころ

のたむむなるこころ我あこころ

のたむむなるこころ我あこころ

のたむむなるこころ我あこころ

のたむむなるこころ我あこころ

いひこころをあらうやふ

時きりしあは通るるな

りありあもとりありあ

あり

ちうくのこころ 日本紀よ云

とまてあうくとよはり

河海よいづくのいひ

云義之史記叙職傳上日吾

欲云云あり又然ことまてあ

わふりし 下学集日充賢上古時倭漢兩國未知家人居三寔恙由齋入故本朝

書札宋相勸日充賢言士寔之充賢閉塞可防恙由 無恙といふまのハ戦國策よ

てむより何事もふきこころいふ何れは世俗の消息乃末は充賢

とまてあうくとよはり

てたーやふかなうー

書問尺牘の書尾亦自齋保

齋自史至枕珍重ふとま

もあこころなるこころ我あこころ

のたむむなるこころ我あこころ

のたむむなるこころ我あこころ

のたむむなるこころ我あこころ

のたむむなるこころ我あこころ

のたむむなるこころ我あこころ















甲香 本草圖經曰甲香全馨ケイリク

家稀用但合香家所須又有甲香ガ其香如貝の香ガあり

大小用小者佳也可聚香使

不散也 和名集曰異物志

曰甲香俗曰螺屬也可合衆

香燒之皆使益芬捩燒則臭

へあつと 一本よむとあ

正名のとりふやあかつ

あし今全沢よそ尋ね

ハスのとつひ又つふもよ

也兼好く附ふとをあつと

と云きふよやよのよ徳

とと一たよ一てはのわうあつき貝ありそれ成へあつととらう

鉄柱巻一

ガ

ガ

くつてそのものかうあつと  
くつてその貝のやありむ

海國全澤ガらうらうにあり

よ。和の老き魚あつととやう

とらうらう

とらうらうき人のとらうす。又ら

ちひひふ。とらうらうらうらうらう

とらうらうらうらうらう

の物色

仕丁やあつとらう 仕丁とあ

てつうとれよかろとよあり

下敷のよと

より仕丁やあつと。とらうらうらうらうらう。有う

くうとらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

やあつとらうらうらうらうらう

とらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

鉄柱巻一

ガ



老子曰  
為名者為  
常非名  
為道  
常道  
北之  
坐虛無  
大道眼

むきつらへるまじき人ゆらぐ。今さうかくやハ  
あつふ人もありぬくまじきまをまじくしく  
よれんまをさうあかゆ。まじき人れらまじき  
事あつひら。又うとあつひらぬ一

名利はつらきて 莊子盜跖  
篇子正為名我正為利名利  
之實不須於理不監於道  
害をひ 文選不懷寶以買  
害考不饒表以招累  
才のほりハ金と一して  
白氏文集五十一 身後堆金  
柱北斗不如生前一樽酒

名利はつらきて  
まあく。一生銭くら一むらう  
とらうあれ財あがせれを  
銭まのほはぬと。言とかひが

唐書秦王引尉遲敬德為右  
府參軍屢立大功隱太子嘗  
以書招之贈金四一車固辭  
秦王曰公之心如山岳雖積  
金至斗豈能移之秦王者謂  
太子者太宗  
凡速成也  
金ハ山よすて 莊子天地篇  
截金於山截珠於淵不利貨  
賤不迫貴富不樂壽不哀天  
不榮通不醜窮 文選東都  
賦損金於山沉珠於淵  
同第三截金於山截璧於谷  
註云括倒擊也  
つとれぬ久 白氏文集遺  
文三十軸軸金玉出龍門  
原上出埋骨不埋名

とまひくあつたらち也。かれはまハ金  
河で事とささくも。人のたの  
まうはつらる人よ。とらうあつ人の  
目とまうこらむらうのみ。又  
あちきほ。大あつ車肥ら馬金  
まはらまらも心あらん人らそを  
らうあつとらう人よ。金ハ山よ  
すて。おつ瀬あくへし。利はまらハ

失道卷一  
終







察此大偽所以生也息齋  
曰不聖而又有小智小惠者  
竊仁義而行之則偽自此滋  
乱自此始 又老子曰絕聖  
弄智

煩惱 大智度論曰煩惱者能  
念心煩作惱故名煩惱  
又曰屬屬屬屬屬屬是名煩惱  
大藏一覽詳

不可多一條也 莊子齊物  
論曰方可不可不可不可  
可 又曰可乎不可乎不  
可物固有然物固有可  
無物不然無物不可故道通  
是善惡是非不可不可  
終不曲直邪正一切世間

維維とくえら彼よりくまひ

とねうんがまればとく一の

かありかのねれは後つてさう

小益あり。是とねうもひさう

色。くじとせして智とせとめ

賢とねう人のためよひる智と

むつてくつりありや後を

悩の場をせらるやつてまひ

の物端を切らうの意

何とく善とく 天台の善

悪不二六祖の不思善不思

悪とあるは通とく

はしもの人ハ真人とく

逍遙遊目至人無已神人無

功聖人無名梁武帝建寺度

僧達摩曰無功德

る利の要とくとむる 發端

の初に應映せり

る利とくとむるの要の二

術文也莊子盜跖篇小興各

就名也云て下の白は非以

要各答也とあり要の字は

假名つをくると合て張り

未だんと

てあるまよ一の智おあすい

ふとく智とくふくま可不可

條也。いあるとく善とく

人ハ智もあく法もあく切もあ

くもあ。維維とくえら彼より

乞婦とくく。愚愚とくまらるる

くはつりけんとくさう

とくまらるるのさうひり

とくまらるるのさうひり



て公利の要とともしつらにくはと。余事多  
皆相ある。いよよいねふよよいす

法然上人 源空也姓藤原氏  
美作國鞆岡人也

或人法苑云人よ念仏の時時  
唯除障時

とりされて。初とをさうりゆ事いしてこれらり

生要集 行住中外语默作 常以此念有 唯

をやめゆんとやうせば。目だあさらんやと念仏

強へとこへ入れりきる。いんたうとくりきり又強

ハ一定とおもへん一定。不定とおもへん不定といふは

是もたし。まじりあうも念仏すれは強

其言 壽經  
設我信佛  
十方衆生  
開我名号  
御念我名号  
植諸徳本  
至心回向  
我國不果  
者不取正覺  
亦不取果  
還願云々

信心故 不信故  
大經中八類内亦云願云々  
數公不信心者下云云  
不信不信生云云

いよよいねふよよいす

いよよいねふよよいす  
東唐よとねんころよい  
目こりきりあり

栗とのとこひて 吳中粟  
とあつハ非ハ系六系町お老  
且あり常お大豆を食ん交  
よ米とくりり人の交ゆり  
と豆府間と京とくらせきり  
人よ豆婆とそ云きり又  
伊豆國之端お或人のむゆめ  
ありぬ敷とくすく菓を  
のこらひきりりこはせ或  
人よ嫁しきりとあ

目情國よ。あれ入るやふよ

のむとめ。かきりきりきりきり

まじりあうも念仏すれは強

た粟とねんころよい

いよよいねふよよいす

のむとめ。かきりきりきり

おやゆりきりきり

法華經云  
念仏すれは強  
念仏すれは強  
念仏すれは強

念仏すれは強  
念仏すれは強  
念仏すれは強







白氏文集曰人非木石皆有情  
情不知不遷頑城也 伊勢  
物語はむくおとこあつたり  
女ととくらのあま月日へて  
くりいよまのあつねと  
くろくやひきん

おろくはひきぬをねらして  
むひよあつりきつるや  
あつねの時よとておは感  
らる事あきよあつり

唐橋 村上源氏久我の庶流  
教相 真言宗小淨満聖教  
学と教相と一おこひきん  
子と事相とす

唐橋中將とよふ人のまに  
僧とて教相の人けし  
くろく。氣れあつる痛あつる  
やくだる能に

氣のある 源氏の菜下  
けのけがアめつるま  
らおひきん 眉額  
入れて目のうらあり

二の條にれども 俗人の舞  
乃面々赤くしてわうろ  
一き面々安摩とてわし  
き原ありま次は舞と  
の舞と云く  
鬼乃くふふあり 剪髪  
活のせとら馮大異り鬼  
おへて鬼のうらあり  
てくへてこれん里人とも  
おときて近つりきりこと  
おまひ合せ侍る

ていまもおひきぬをねら  
おつろひきぬをねら  
あつて同肩教あともねら  
ておひきぬをねら  
舞れおまのやうにえき  
たおましく鬼城なありて

月ハつききれまよつき  
はつたれられぬも  
はつたれられぬも







河海子 細評 少

いかしの房よさからつて

そむらへぬつて古今よ

かくりむ乃素よそむらつて

うらひすこのこまはうらへん

之あらず えもいふまむと

ろきそそと

少きよまじ あつたふん

これ敷く又次やむむああり

又すまひよまむとたゆむ

とのあまあり

榻 和名焦榻之床也車とす

とてそくとのくらうきもの

やうありとのこ

女房のそひきせよういあ

よりの用とととをひ風を

あまふんよまむ。ちやうなつらうへ

むらりまむして。さうりあつたれ

申のちうらむらむ。縮むれあつた

そからつて。ふりなむ。縮むえあつた

吹すまひつらむ。縮むえあつた

人もあじとちひよ。せうらう

あまがらう。さうらうのけ

いせハ。縮むえあつた

たき地の白ひこ 遠氏系を

ようちうらひひまへるまむ

せうとくハあつたまへるまむ

人もあじとちひよ

きんじ きんじ 想門のあつちよ入

榻 志 よそらう車けんゆりも

あまの目とまらむらして。さうらうのま

一ますよまて。はひまあつた

よ法師ともまらつらう。縮むえあつた

たき地れ白ひもあまむらちす。寝殿より

あま女房の道風 まむ ようあま

あつた

心つていふらう。あまのまむら

秋の時つて。あまのまむら



虫の巻うことりまーく

加言とちり 添氏幻巻よ

つまくと箱ふきくくすき

くことりまーきむのきま

又整ふかまかこのか又か

つけのきふよふとそく

ふへー

么世 閑院の未流筆一派の

家ん

せうと 兄之又兄弟姉妹と

も云背夫ともくきり

人核の本れ僧正とくひくうげふゆりへくす

皮本城きくればよりそ振の省クれまきりら

の僧正とくひくうげふゆりへくす

かりとそくきりせれんを

せえ 堀沈僧正とくひくう

柳本城きくればより強盗法

強盗よあひくうゆへよげん

るかひくう時 万巻よ

或人清めへありきくろ

及のゆきつゆいりきくろ

古今小

失道巻一

四一八

金巻巻一

四一七

家よりとれびのひくことか

まぐちさ水のもはかあり

却れそより節氣法来まき

心して月だまらる事定に

世あは後れせうとよ

と安えーハきいめて腹あー記

核の本れありき

皮本城きくればより

の僧正とくひくう

かりとそくきり

せえ 堀沈僧正

柳本城きくれば

強盗よあひくう

るかひくう時

或人清めへあり

及のゆきつゆい



吐くゆらんこととえりあま

毛詩邶風終風篇寢言不寐

頽言則嘔註曰我甚憂悼而

不能寐汝思我心如是則嘔

耳鳴也 雜占十六卷師古

曰嘔音丁計反 李濟翁資

暇集今人每嘔必有祝所祈

云云案邶終風篇註頽猶思

也言猶我也蓋他人思我

くまめくとしひまてゆきりか

れお何事せかハの流いともひ

く嘔云人道我此古之遺語也 瑣碎錄曰

耳鳴也 雜占十六卷師古

曰嘔音丁計反 李濟翁資

暇集今人每嘔必有祝所祈

云云案邶終風篇註頽猶思

也言猶我也蓋他人思我

則嘔之也鄭又稱古遺語每

嘔云入道我以為他人說我

く則嘔此正得其頽言者非

祝頽之頽非言語之言今則

くまめくとしひまてゆきりか

れお何事せかハの流いともひ

く嘔云人道我此古之遺語也 瑣碎錄曰

耳鳴也 雜占十六卷師古

曰嘔音丁計反 李濟翁資

暇集今人每嘔必有祝所祈

云云案邶終風篇註頽猶思

也言猶我也蓋他人思我

則嘔之也鄭又稱古遺語每

嘔云入道我以為他人說我

光親卿 東鑑二十五葉又三  
年七月十二日 按光親卿  
去日出家者為武田五郎信  
法名西親 者為武田五郎信  
光之預下向而鎌倉使相逢  
于駿河國車返邊依觸可誅  
之由於加古坂梟首訖時年  
四十六云云

自祝乃由誤解詩句  
容齋隨筆第四曰今人嘖嘖  
不止者必嘖嘖祝曰有人說  
我婦人尤甚云云嘖音帝鼻  
氣

くまめくとしひまてゆきりか  
れお何事せかハの流いともひ  
く嘔云人道我此古之遺語也 瑣碎錄曰  
耳鳴也 雜占十六卷師古  
曰嘔音丁計反 李濟翁資  
暇集今人每嘔必有祝所祈  
云云案邶終風篇註頽猶思  
也言猶我也蓋他人思我  
則嘔之也鄭又稱古遺語每  
嘔云入道我以為他人說我  
く則嘔此正得其頽言者非  
祝頽之頽非言語之言今則

其禁厭之法  
日本記第一定  
光親卿院は勝海草部して  
さあひきるとはあめされて供  
れと出されてはあめかりきと  
くひらしむかひかみかみの

はくまの 鶴重とも筑重と



もくけアヒロリこのやうあ

抄後

やんともきこと こそまてきて

かめりの初

申へる一入てお出よるり。女房

あまきく解けはよるおけりあま

やあられまを省減のあまいかんともきこ

とありと遊く感せしを治るると也

老来アてけめてみらる

朱文の勸学文勿謂今日不

学而有来日勿謂今年不学

而有来年日月逝矣歳不我

延嗚呼老矣是誰之愆

あつき塚 李卓吾浄土決曰

古人句曰莫待老来方学道

言墳盡是少年人 待老来

始莫学道古墳多是少年人

すきぬるものあやまらる

庄子蘧伯玉行年六十而知

五十九年之非淵明歸去来

辞学今是而昨非

あつてはまはるものあやまらる

まておひものあやまらる

やんともきこと こそまてきて

かめりの初















からゆり 迦野よりあり

極樂寺 八幡宮護國寺別當

安宗開山也縁起云大安寺

傳燈大序位安宗謹言伽藍

壹院号曰極樂寺在西城國

手上右件寺奉為石清水八

幡大菩薩三所君達林梵帝

釋天神地祇兼師僧父母六

親眷屬三有法界有識無識

皆悉為令往生極樂淨土以

去元慶元年始所建立也云

安宗者行教和尚

之弟子也

高良 武内宿禰也日本紀子

あり 天武二年二月八日

高良詔宣誓曰天皇御宇為

農臣武臣之徒將又公卿補

初らむらうらまめきり。極

楽寺なるはみもとあつて

らとらふてうりはらう。ま

の人よあひて年々あひは

事らじはりねきししも

るしなまもくうおんけ

そもあつてうらまめきり

ハ。はらうりありせんゆ

かり

仁曰武内神大臣孝元天皇

五世孫也在宮二百四十四

年春秋二百九十五年但薨

年月日人不知之或曰仁德

天皇五十五年丁卯薨

或説かゞ玉皇命也

かゝりうゝゝゝゝ

まけきことあり

是も仁智寺此法師聖の法師あるとすらふ法とく。

者あそふと省けり。酔て真よ入あまのこころあふ

あゝあゝとらるる歌はうらま

世俗よよよとらるる鼻を

和名集説文曰三足兩耳和

五味寶器也







せうらんともおぼす。ころがたにあらざるものやうに  
 耳をふらさしむ。余りうらあつたきいさかんか  
 とてそくしりまるとまじりて入てかひ  
 備へし。いさらりりききたるよ。耳鼻うせしけり  
 らぬせにたり。ひん命あうきむ。いさかおひりきり  
 津家ひろよちいき。奥のありき。さうくさきひ出く。  
 あうらんたるむ法師ともある。強あつあきひ法師  
 ともころして。風流の破子やうの地念ちんひよと

風流のりりころのあり  
 檢アアと淡へーやうき破  
 也破種とも破子ともあり  
 飲食をえり見あり  
 和名曰櫻子カヒケ今俗取謂破字  
 是也。以餉送人也  
 なるひの畧 仁和寺あり  
 そののり 喉のま也  
 らことそくけり。いそよなり。うきくはひてかこ  
 わうひめらりて。有つる甚このむらよあをわて。いさか  
 いたし。いさか。いさか。いさか  
 いたし。いさか。いさか。いさか  
 も萬葉よあり  
 源氏源麻よいさか。いさか。いさか  
 今。おひの畧かう後たうよきあよろこ  
 とれて。そみち地りし。きおと思  
 う。ぬきなり。いさか。いさか。いさか  
 ぐいよ。いさか。いさか。いさか  
 くんむら。験ちあらん。傷あら  
 けり



子きれん 花きよまらハ  
困のまらうへーさひれ  
ててうろと云かん

紅葉たえ 白氏文集林  
同燬酒焼紅葉石上題詩拂  
緑昔

いひまろひて 五よりの葉せ  
りるまらうまひて とくし  
くわつまひらうあり

山をあましくも 求也求食ハ  
きあとの念とととむら也  
定家多よ

ふらうへーだあせぬまらうらう  
よこいひあまうのこらうは

ふらうへーだあせぬまらうらう  
よこいひあまうのこらうは

あさしももぶらうりきり  
らうへーだあせぬまらうらう  
よこいひあまうのこらうは

あさしももぶらうりきり  
らうへーだあせぬまらうらう  
よこいひあまうのこらうは

内変まらうらうらうらうらう  
しものさあせ。きこはらうらうらうらう  
きり。あまらうらうらうらうらう  
あいふさきもれあ繁

衣をむひとくまへー 楊誠齋  
詩禁屋炎熱不可居高天來  
氣亦全無

家乃生りやう家とむら  
し。きらうらうらうらうらう

きびらうらうらうらうらう  
あー。あさしももぶらうりきり































寛永東大寺に於て此の如き

延政門院 後醍醐天皇の皇女

こころをいふ所のつれなき

はるかにいふ所のつれなき

かみつゝいふ所のつれなき

とつとつはつはつはつはつはつ

とつとつはつはつはつはつはつ

ありとてはつはつはつはつはつ

せふふとつとつはつはつはつ

ふーくくす明親法師はつ

てようあそつとつはつはつはつ

いぬをわにぬの敷みかむとら

このまへにさつとつ

鉄籠巻一

らん

六十四

延政門院いふときあへり

しげり時院へまらるる人ははつこと

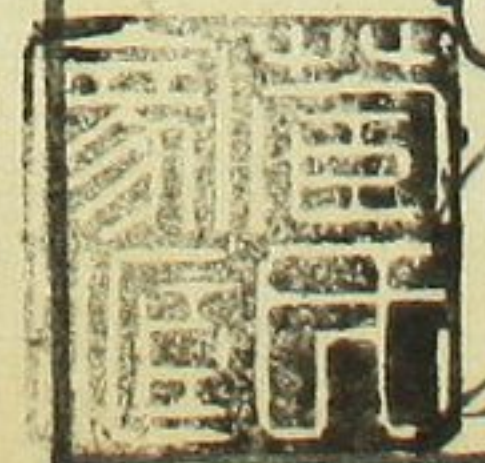
つてとて。ドとせはつひきつはつ

あかり牛井つのはつはつはつ

ゆくのりとうまはつはつはつ

ふーくくあつひまらつはつはつ

とあつと



白研軒

守る戸

守る戸



